

気になる症状や、いつもと違う様子があったら、トリミングの前に病院へ！  
「たぶん大丈夫だろう・・・」が、後に大きな症状に繋がることがあります。  
病院へ行った方が良いかどうか迷った時も、お気軽にご相談ください。

#### ◆角膜炎

##### 【症状】

涙の量が増えて、目の周りが常に濡れている状態が続く。眩しそうな表情が増える。目を気にして、手でこすったり、物に顔をズリズリする事が増える。

##### 【原因】

角膜への刺激や、細かい傷が付くこと。異物(草や埃など)による傷。シャンプー剤の影響のほか、栄養不良による体質の変化など。

##### 【トリミング】

シャンプーが可能かどうかは獣医の指示に従う。

##### 【感染】

なし

#### ◆緑内障

##### 【症状】

目の充血、眼圧の上昇により、眼球が大きくなったり突出。痛みにより攻撃性が増す。視神経、網膜の萎縮が起こると、視界が狭まり視力障害から失明。片方なると逆の目にも可能性があるため、継続的な検査が必要。

##### 【原因】

房水(ぼうすい)という目の中にある液体がうまく排泄されずに眼圧が上がる。また、目の傷や角膜異常、目の炎症、他の疾患による眼圧の上昇も関係がある。ステロイド投薬による影響もあると言われている。

##### 【トリミング】

シャンプーが可能かどうかは獣医の指示に従う。トリミング可能と言われていても、いつもより目を気にする事がある場合は念のため予約を変更する。

##### 【感染】

なし

#### ◆外耳炎

##### 【症状】

耳の中や、耳の付け根(後ろ側)をかく事が増える。いつもより耳の付け根に毛玉が出来やすくなっていれば要注意。

頭を振る(ブルブル)が増えたり、絨毯やソファーなどに耳を擦り付ける仕草が増える。

耳垢は、焦げ茶色のべたべたした質感に変わり、独特の臭いがある。酷い場合は、耳垂れ(粘度のある液体)が出てくる。耳道のほか、耳の入り口の皮膚も赤くなり、腫れる事も。

痛みがあるため、触られることを嫌がる。

##### 【原因】

皮膚炎の一種のため、細菌感染が多い。

湿度の上昇に伴う蒸れ。乾燥による肌バリアの低下。免疫力低下による常在菌の繁殖。

体調不良や、栄養状態のアンバランス。

耳毛を抜いた時に付く細かい傷。綿棒(綿素材)での掃除で付く細かい傷。

##### 【トリミング】

シャンプーが可能かどうかは獣医の指示に従う。感染する場合は完治から1週間。

##### 【感染】

常在菌の繁殖であれば、感染なし。真菌などの場合は感染あり。獣医に確認する。

#### ◆耳ダニ

##### 【症状】

強い痒みなどから、外耳炎の時と同じような仕草が増える。

ダニはとても小さく黒い(目視できる)

皮膚の上で動いているのが確認できるので、発見した時は速やかに病院へ。

##### 【原因】

他の犬からの感染。接触だけでなく、感染している犬がいた場所からもらう事もある。

耳垢を好み寄生するため、なるべく清潔な状態を保つ。

##### 【トリミング】

獣医の治療終了から、最低2週間後。同居犬も。

##### 【感染】

あり

#### ◆くしゃみ、鼻水

##### 【可能性のあるもの】

ジステンバー(ワクチン未接種)、ケンネルコフ(ワクチン未接種、パピー、シニア)

鼻腔内腫瘍、アレルギー、免疫介在性鼻炎、歯周病、真菌感染、鼻腔内異物、など

##### 【原因】

ジステンバー、ケンネルコフは、ワクチン未接種の犬のほか、パピーやシニアなどの免疫力が低い犬にも感染する。

ケンネルコフは「犬の風邪」と呼ばれ呼吸器の感染症。乾いた咳をしょっちゅうするのが特徴のため、気が付きやすい。

免疫力のある成犬であれば、軽症または無症状で体外にウィルスを排泄するが、パピーやシニアなどが感染すると、肺炎や気管支炎に発展することがある。気管虚脱の傾向がある場合は、虚脱が急速に進み窒息死に至る。

膿のような鼻水を出したり、高熱が出ることもある。

※ジステンバーは、混合ワクチンのページで内容を確認してください。

鼻腔内腫瘍は、腺癌、軟骨肉腫、骨肉腫、リンパ腫など、病院で診断されます。

免疫介在性は、リンパ球形質細胞性鼻炎など。これも病院で教えてくれます。

アレルギーでは、鼻腔内で原発することはほぼないので、細菌性鼻炎などの合併症が考えられますが、これも病院で分かります。

歯周病では、歯肉内に歯周菌による膿が溜まり続け、上顎の骨を溶かし鼻腔内に貫通することで刺激が起こり、くしゃみと一緒に膿が混ざった鼻水が出てきます。

##### 【トリミング】

感染症が原因の場合は、獣医の治療終了から、1か月後(感染があるかは獣医に確認)

同居犬も。診察も必須。

感染のない場合は、獣医の指示に従う。

##### 【感染】

ケンネルコフ、真菌、ジステンバーは感染あり。

その他はなし。

#### ◆気管虚脱～きかんきょだつ(難治性疾患)

##### 【症状】

空気が通る気管が、筒状の形から平たい状態にまで潰れていくため、徐々に呼吸が苦しくなる。水を飲んだ後にむせる、「カッカッ」と何かを吐き出そうとするような咳をする、首に軽い刺激があったら咳をする、咳をした後に吐こうとするような仕草(実際には嘔吐なし)、運動や興奮した時に「ガーガー」というような呼吸音がする。

##### 【原因】

根本的な原因は不明。

気管の軟骨が弱い、遺伝など関係があるなど、研究がされているようです。

初期段階では、内服薬や注射治療などで進行を遅らせることができます。

レントゲンで検査できるので、たまに咳が出る場合は早めに対処を。

首輪を止めて、胴体に付けるハーネスに変更し、首への負担を軽減させる。

室温と湿度にも気を付ける。

食事では、軟骨の健康を維持できるようなフードや手作り食に。

たんぱく質(コラーゲン)や、軟骨内の水分保持をするプロテオグリカンを含む食材(軟骨や山芋など)があります。また、炎症をサポートするグリーンマッスルパウダーやオイルのほか、病院専売品のアンチノールなども推奨されています。

##### 【トリミング】

グレードが上がるほど、呼吸器への負担は大きいため、状態によっては一番負担がかかるシャンプードライは中止。症状が軽い場合は、喉への負荷や、シャワーなどの蒸気による影響を踏まえた内容に変更します。

##### 【感染】

なし

#### ◆その他の呼吸器疾患

咽頭麻痺～いんとうまひ(気管虚脱の合併症)

軟口蓋過長症～なんこうがいがちょうしょう(特徴はいびき)

短頭種気道症候群～たんとうしゅきどうしょうこうぐん(パンティングが激しい、喘息音など)

散歩の後のパンティングが落ち着くまでの時間が少し長くなっていたり、いびきをかくようになったなどの異変があった場合は、病院での早めの検査を。

呼吸器系が重症がすると、肺炎、気管支炎、心臓肥大などの影響があります。

#### ◆アトピー性皮膚炎、アレルギー性皮膚炎

##### 【症状】

1歳までは症状が軽症のため、判断が難しい。

徐々に悪化し、2～3歳になるとアトピーと診断されることが多い。

手足の指の間(水かき)、手足の付け根、唇、目の周り、脇の下、耳などの皮膚に赤み、痒み、脱毛(薄毛)、フケ、色素沈着(黒っぽくなる)、皮膚が厚ぼったくなる。外耳炎や結膜炎と併発することも。

また、皮膚バリア低下による細菌感染、真菌感染も。

##### 【原因】

ハウスダスト、カビ、花粉など。

アレルギー(食事、草木なども)。胃腸不良。栄養不良。

シャンプー剤などのミスマッチや、シャンプー方法なども影響する。

##### 【トリミング】

真菌などの感染症がなければ、治療と並行できる(獣医の判断による)

同居犬は診察上、問題がなければOK。

皮膚の状態が悪い(出血や熱を持っているなど)がある場合は、細菌感染を防ぐために延期することもある。

##### 【感染】

真菌などの感染症以外は、感染なし。(獣医に要確認)

#### ◆膿皮症～のうひしょう

##### 【症状】

ニキビのような出来物が特徴。

赤み、腫れ、べた付いた質感(表在性膿皮症)

膿疱ができ、つぶれて瘡蓋ができる。赤みのほか、痒みが出ることもある(浅在性膿皮症)

瘡蓋、じくじく(体液が出る)、出血など(深在性膿皮症)

いずれも病院で検査してくれます。

##### 【原因】

免疫力の低下、皮膚のバリア機能低下、栄養不良、胃腸障害、不衛生、ブラッシングをしていない、ブラッシング等で細かい傷を付けた、など

##### 【トリミング】

出血等がない場合は、状態に合わせた内容で施術可(獣医の判断による)

##### 【感染】

膿皮症であれば感染なし

#### ◆脂漏症～しろうしょう

##### 【症状】

痒み、紅斑、フケ、脱毛、瘡蓋、皮膚のべたつき。

脂漏性、乾性、油性の3つに分類される。いずれも病院で検査してくれる。

炎症部の中央はキレイで、周りを取り囲むようにフケが出て、後に色素沈着が起こる。

##### 【原因】

皮膚バランスの乱れ、ホルモンバランスの乱れ、栄養不良、胃腸不良、低品質なフードの脂質。

疥癬、皮膚糸状菌、マラセチア、爪ダニ、毛包虫、ミミヒゼンダニなどの感染。

##### 【トリミング】

感染によるものでなければ可。同居犬も。状態に合わせて施術。

##### 【感染】

体内バランスによるものであれば感染なし。獣医へ要確認。

◆疥癬～かいせん(人獣共通感染症)

【症状】

強烈な痒み。掻きむしる、咬むことで皮膚に傷が付き、細菌感染から膿皮症などにもなる。瘡蓋や大きなフケ、脱毛など。

【原因】

ダニの一種で、皮膚内で活動する。皮膚内で穴を掘り動き回ることと、ダニの糞や分泌物なども皮膚を刺激することで、強烈な痒みとなる。

病院で、ダニを殺す成分が入った温浴材やシャンプーを使ったり、抗生物質などで治療してくれます。

【トリミング】

不可

【感染】

あり。人にもうつるので要注意。

◆毛包虫(アカラス)

【症状】

小さな脱毛から、ニキビのような膿疱ができて炎症が始まる。フケや赤みが出る。痒みは少ないか、ない。

【原因】

ダニの一種で、毛穴に住んでいる。(ニキビダニ)

免疫力がある健康な時にはダニの繁殖もなく皮膚トラブルは出ない。

免疫が下がると繁殖し、症状が現れる。このダニは、生後まもなく母犬から伝染。

【トリミング】

皮膚の状態によって可。獣医の判断による。

【感染】

なし

◆ノミ(人獣共通感染症)

【症状】

かゆみ、脱毛、発疹など。アレルギー症状。

【原因】

散歩時に寄生されたり、卵が被毛に付着するなど。ノミが血を吸う時に唾液が入ったりノミの排泄物(蛋白質)が原因でアレルギーが出る。

【トリミング】

病院での治療終了後から、最低でも1か月後。同居犬も。

【感染】

あり。人にもうつるので要注意。

◆マダニ

【症状】

皮膚の中に、頭ごとめぐりこみ寄生する。痒みや炎症がでることもある。

【原因】

草むらなど、散歩時に寄生される。

赤血球が破壊されるバベシア症の場合は、黄疸や発熱、貧血がある。

マダニによる人獣共通感染症

食欲不振、立てなくなる、元気がなくなるなどの「ライム病」や、ウィルス媒介によるSFTS(重症熱性血小板減少症候群)があります。人が感染すると、犬よりも重篤な症状が出るので、獣医に確認しておくことが大切。

【トリミング】

病院でのマダニ駆除後、獣医の判断による。ライム病などの感染症がある場合は不可。

【感染】

ライム病、SFTSは感染あり。

◆皮膚糸状菌～ひふしじょうきん(人獣共通感染症)

【症状】

円形の脱毛、瘡蓋など。痒みは少ない。

【原因】

皮膚、被毛、爪に入りこみ繁殖する真菌(カビ)の種類。  
土にいる土壌菌(石膏様小孢子菌)が感染するなど。  
パピーやシニア、体調不良などによる免疫の低下、換毛期など。

【トリミング】

不可

【感染】

あり。人にもうつるので注意。

◆マラセチア

【症状】

赤み、発疹など。独特な臭いがある。  
耳、脇の下、皮膚のシワの間、内股など、通気性が良くない所に出る事が多い。

【原因】

常在菌の繁殖。免疫力の低下、栄養不良。皮脂の過剰分泌(シャンプー剤などのミスマッチ)皮膚バリアの低下。

【トリミング】

獣医の判断による。状態に合わせて施術可。

【感染】

なし。

◆回虫～かいちゅう(人獣共通感染症)

【症状】

食欲不振、嘔吐や下痢、腹痛などの胃腸障害

【原因】

寄生された犬の糞便から、伝染する。

【トリミング】

便から卵が確認されなくなり治療が終了してから、1か月後。同居犬も。  
体力の消耗が激しいため、トリミングはしばらく避ける。

【感染】

あり。人にもうつるので注意(トイレの片づけや、嘔吐物処理時など)

◆鞭虫～べんちゅう

【症状】

軟便が続く、便の最後に粘液と血が混ざったものが出る。重症時は体重減少など。

【原因】

感染している犬の便に入っている虫の卵が入ることによって感染する。

【トリミング】

駆除薬などの治療が終了してから、1か月後。同居犬も。犬の体力消耗が激しいため、様子を見て決める。

【感染】

あり

◆鉤虫～こうちゅう(人獣共通感染症)

【症状】

軽い下痢、貧血。パピーだと重症になりやすく、貧血、腸炎、栄養不良、ショック症状。

小腸に寄生し、血液を吸って生きている。

【原因】

散歩時にくっついてきた幼虫の経皮感染(皮膚からもぐりこむ)や経口感染のほか、パピーだと胎盤感染などもある。

【トリミング】

数回にわたる投薬治療が全て終了し、獣医からの治療終了から1か月後。同居犬も。ただし、寄生虫による体力消耗などがあるため、様子を見て決める。

【感染】

あり。

◆条虫(人獣共通感染症)

エキノコックスや、瓜実(うりざね)が多い。

【症状】

食欲不振、消化器の不調など。お尻を気にする、肛門に白い糸のようなものや、ゴマ粒のようなものが付いている。お尻歩きする事が増える。

【原因】

ノミが媒介する瓜実(ウリザネ)は、経口摂取。拾い食いなどに注意。

エキノコックスも同じく、糞便中に含まれる卵が体内に入ることによって感染する。

【トリミング】

治療が全て終了し、獣医からの治療終了が告げられてから1か月後。同居犬も。

【感染】

あり。

#### ◆フィラリア

##### 【症状】

寄生している数が少なければ症状は出にくい。

数が増えてくると、心臓の中や肺動脈に寄生しているため、血液循環に影響がでる。

あまり散歩をしたがらない、食ベムラ、軽い咳などが見られる。

重度になると、失神、腹水、貧血、血尿、激しい咳になり、急速な悪化があれば手術。

フィラリア駆除の注射などで一気に殺虫することもできるが、肺動脈が詰まるなどの危険もある。

##### 【原因】

フィラリア予防薬を飲ませていない。

予防薬は100%フィラリア症から守れます。

##### 【トリミング】

獣医の判断による。体力の消耗が大きいので、完治後も体力回復まで止めた方がよい。

##### 【感染】

なし

#### ◆狂犬病(人獣共通感染症)～年に一度の法律で決められたワクチン

##### 【症状】

致死率100%。神経系にダメージがおこるため、狂暴化、挙動不審、食欲低下、よだれが流れ続ける、咽頭炎症、全身麻痺などで、呼吸困難となり死亡。

治療法はなし。診断が確定すると、安楽死となる。

##### 【原因】

唾液を介して哺乳類全部に感染するため、法律で義務付けられているワクチンの未接種。

長らく日本では出ていませんが、外国から来る船に同乗している犬や、野生動物の輸入などが増えているため、海外から入ってくる可能性が高く、危険視されています。

##### 【感染】

あり

#### ◆ジステンパー

##### 【症状】

高熱、鼻炎、結膜炎、下痢などの消化器の炎症、肺炎などの呼吸器の症状。

神経が侵されるため、異常行動や痙攣などを経て、死亡する確率がとても高い。

##### 【原因】

感染した犬の鼻水、目やに、唾液、尿などから感染。食器や飲み水などを介した間接感染もあるので注意。治療方法はない。混合ワクチンの未接種。

##### 【感染】

あり

#### ◆パルボ

##### 【症状】

激しい下痢や嘔吐。血便、粘液便。白血球数の減少。脱水から衰弱し、ショック状態になる。心不全になることも。

##### 【原因】

パルボに感染した犬の便や嘔吐物から広がる。パルボウイルスは体外に排出されても死活しないことが特徴なので、簡単に感染する。治療法はない。混合ワクチン未接種。

##### 【感染】

あり



◆犬コロナウィルス ※ヒトのコロナウィルスとは別です。

【症状】

下痢、嘔吐。腸炎。

パルボと混合感染を起こすと、重症化しやすく死亡する。

【原因】

感染した犬の便や嘔吐物などから感染する。混合ワクチン未接種。

【感染】

あり

◆アデノウィルス

【症状】

1型: 伝染性肝炎。急性肝炎、突然死、嘔吐、腹痛、下痢、高熱。扁桃が腫れる。口腔内の粘膜が腫れて赤くなる(点状出血など)、内臓出血など。

2型: 喉頭気管支炎(ケンネルコフの原因となる病原体の中のひとつ)くしゃみ、鼻水、発熱、食欲低下、咳、肺炎。

【原因】

感染している犬の唾液や鼻水、尿などから感染。空気感染はなし。混合ワクチン未接種。

アデノウィルスは体外に出ても抵抗性が強いいため、室内で数か月間生きられ感染力も維持。

他のウィルス感染と混合になると、致死率が上がる。

【感染】

あり

◆レプトスピラ(人獣共通感染症)

【症状】

発熱、敗血症によるショック死。

食欲低下、目の充血、潰瘍、嘔吐、下痢、黄疸、出血、血尿など。

【原因】

混合ワクチン未接種。レプトスピラ属の細菌感染された哺乳類の尿や、汚染された水から感染する。川や湖など、水辺で遊ぶことがある場合はワクチンで予防する。

【感染】

あり。人にもうつるので注意。

◆ブルセラ(人獣共通感染症)

【症状】

症状はあまり出ない。オス犬は陰嚢を気にしてなめる事が増える。メス犬は妊娠した時に死産や流産になる。

【原因】

感染した犬の唾液や尿、体液から感染。ワクチンなし。

【感染】

あり。人にもうつるが、感染力は低い。

狂犬病ワクチンの接種と、混合ワクチン(5種以上)接種は当店のご利用にあたり必ず必要となっています。

年に一度、抗体価検査をして問題なければ、混合ワクチンは毎年打つ必要はありません。